

関西縄文社会の地域的特色と その背景

The Factor and Background of Characteristic of Jomon Society
in Kansai District

瀬口眞司

SEGUCHI Shinji

- ① 関西縄文社会論における課題
- ② 理論的基盤と論点の整理
- ③ 資源利用の方向性と強化の程度の検討
- ④ 結論

【論文要旨】

関西地方の縄文社会の地域的特色,それを醸し出した要因や背景を問うた。議論のポイントは、〈資源の収穫期間の長さ〉と〈資源利用の方向性と強化の程度〉である。そこで、出土堅果類、打製石斧数、磨製石斧数、堅果類貯蔵量の数量的分析などを行った。

結果、東日本に比べ、遺跡出土の堅果類はより多様で、収穫期間もより長く、集約的な労働編成の必要性が低かった可能性を改めて見いだした。また、土地・森林の開発強化には消極的で、資源利用の強化の程度も低く抑えられていたことも見いだせた。関西縄文社会の集団規模は極小さく、求心的な社会構造も生まれていないが、それは資源環境が貧しいからではなく、集団の求心性よりも世帯の自律性が優先され続け、社会の階層化や財・権力の集中にブレーキをかける仕組みが保持されていたからであり、収穫期間がより長い森林資源環境が、その地域的特色の維持を支えていたと考えられる。

【キーワード】 関西縄文社会、地域的特色、サケ・マス論、食料資源、生産様式

①……………関西縄文社会論における課題

本稿の検討対象は、関西地方の縄文社会——関西縄文社会——である。本稿では、その地域的特色を抽出し、それを醸し出した要因や背景を、東日本との対比などから問う。

本格的な論述と分析を進める前に、遺跡や集落のあり方から既に指摘されてきたその地域的特色について触れておこう。——関西縄文社会の特色の1つは社会規模が小さい点である。同じ縄文文化における社会でも、東日本と西日本では様相が大きく異なっている。遺跡密度には大きな格差があり、西日本における遺跡の数は極めて少なく、密度は低く見える（図1 A）。

また集落構造にも東西で大きな差異がある。例えば、前期中葉や中期中葉、後期前葉などの中部地方や関東地方をはじめとする東日本では、大規模な環状集落が数多く発見されている。そこには堅穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴、埋葬遺構などがしばしば規則性をもって配置されており、広場を核とした求心的構造が見出せる（図1 B～E）。

1980年代以降、集落分析の先鋭化と方法の錬磨によって、これらの大規模環状集落における居住集団の規模が問題となり、同一時期に併存する住居数は必ずしも多くないとする意見が提出された[土井1985, 黒尾1988ほか]。その意見には傾聴すべき点も多い。一方で、重要な現象としてなお注目すべき点は、住居をはじめとする多数の遺構が規則性をもって環状に配置されていることであり、そのようなパターンが数多の遺跡で検出され続けていることだろう。長期にわたって繰り返し遵守される空間規制はやはり共有・継承されているのであって、その規制に沿って大規模な居住の累積が生み出されている。前期中葉や中期中葉、後期前葉などの中部地方や関東地方をはじめとする東日本では、このような求心的な空間規制に基づき、集団関係を累積していく社会が確実に存在している。

一方、関西地方の様相はそれと大きく異なる。求心的な空間規制に基づく大規模な居住の累積は皆無に等しい。また、関西地方における縄文集落の様相を丁寧に整理し続けてきた大野薫によれば、その特色を〈小規模性〉と〈弱定着性〉の2点で指し示されるという[大野2012ほか]。氏によれば、2～3棟の堅穴住居で構成される集落が大半であり、同一時期の居住規模はごく小さい。また、一定期間は定住するけれども、何世代も継続的に定住していない可能性があり、その実態は回帰的な移動と居住を断続的に繰り返すものであって、定着性に乏しかったと想定している。

遺跡や集落のあり方から見た関西縄文社会の地域的特色、東西縄文社会の差異は、概ね上記のとおりだが、では、関西地方の縄文集落はなぜ東日本のように高密度で分布しないのか。どうして大規模な累積が見られず、求心的な構造も顕在化しないのか。上記のような東西の差異を醸し出した要因・背景は何なのか。——関西縄文社会論における課題の1つは、これらの問いを解明していくところにある[鈴木2006]。

その解明には様々なアプローチがあり得るが、解答の仕方に最も大きな影響を与えたのは、山内清男のサケ・マス論と西田正規によるその批判だろう。次章では、この2つを起点に先行研究を振り返り、本稿における理論的基盤と論点について整理したい。

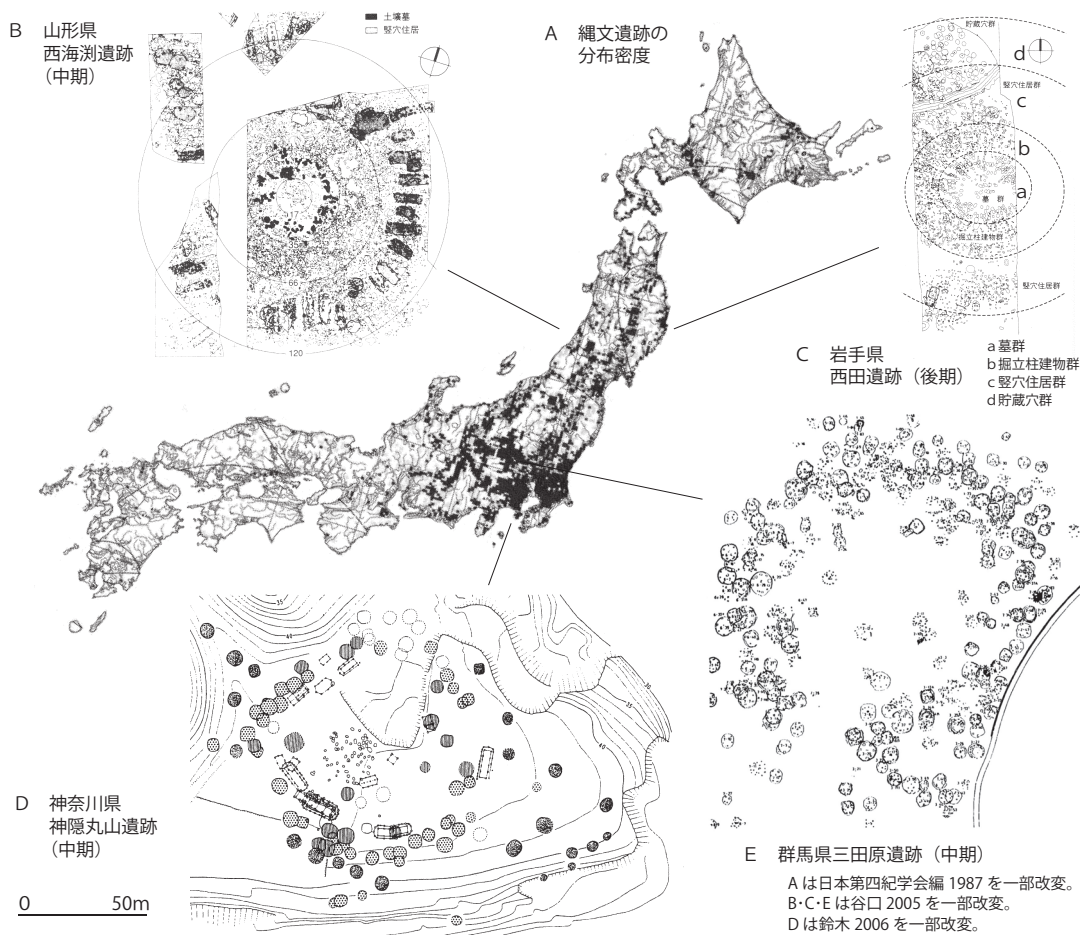


図1 縄文遺跡の分布密度(A)と大規模環状集落の事例(B~E)

②……………理論的基盤と論点の整理

(1)理論的基盤の整理

本章の初めに理論的基盤と観察・考察の関係性について整理しておきたい。

観察の理論的負荷性という概念を我々に気づかせてくれたハンソンによれば、我々の観察・考察は既にインストールされている理論に必ず負荷(影響)を受けるという[ハンソン1958]。例えば東の空に昇る朝日を思い浮かべてみよう。同じ朝日を見ても、インストールされている理論によって、観察と考察の結果は大きく相違する。地動説を理論的基盤とする者達は、地球が動いていると認識する一方で、天動説を理論的基盤とする者は、太陽が動いていると主張するだろう。

このように同じ現象を目の当たりにしているにも関わらず、何を理論的基盤とするかによって、我々の観察や考察の対象・方向性・深度などは大きく相違する。既にインストールされている理論のおかげで我々は現象を捉えられる一方、その理論的基盤のせいで我々の認識はしばしば惑わされ、

捉えるべき現象を取りこぼし、取り違える。理論とは、物事を認識し、解釈していく上で欠かせない便利な知的ツールだけれども、同時に我々の観察と考察に付きまとい続け、時に我々を惑わす不便で厄介な知的ツールである。

理論がもつこのような宿命は、研究の潮流の形成にも影響を与える。各々の個性によって差異は生じるものの、同じ理論を基盤にした者達は同じように観察し、類似した考察結果を生み出すことになる。また、同じ理論が長期にわたって支配的な基盤にされ続けた場合には、よく似た議論が繰り返されることになるし、少数派を異端視することさえあるだろう。前提が自明の理のように扱われ始めた場合には、自らがその理論の負荷を受けていることを忘れてたり、理論的基盤の存在にさえ気づかない観察者を大量に生み出すこともあり得る。勿論、いかに多数派であっても、その主張が正しいとは限らない。かつての天動説がそうであったように、基盤にされた理論がポピュラーなだけで、実態に即していない場合もしばしばあり得る。

一方で、従来とは異なる理論を改めてインストールし直した場合は、どうなるだろう。それまでとは異なる新たな観察対象が選択し直され、新たな認識や解釈も生まれるはずだ。従って、もし研究が停滞しまっているならば、それまでとは異なる理論的基盤の導入は有効な試みになるだろう。取りこぼしていた側面が新たな観点から照射され、それまでにない議論が生まれるはずだ。

以上のような理由から、先行研究を振り返る際には、観察や考察の結果だけでなく、基盤にした理論のありようにも目を向けた上で吟味する必要があるだろう。そこで不具合が見出された場合は勿論のこと、研究動向に停滞や膠着が生じてしまった場合は、思い切って理論的基盤そのものから見直す必要もある。

本稿に関わる先行研究において、鍵となるのは山内清男のサケ・マス論と西田正規によるその批判である。山内は北米北西岸地域の民族誌を紐解き、サケ・マス類の生態的特徴をベースにしてサケ・マス論を構築した〔山内1964〕。北米北西岸地域は、太平洋を挟んで日本列島と対称的な位置に存在し、日本列島と比較的類似した生態環境が分布する。そこには、狩猟採集民であるカリフォルニア・インディアンが生活し、その民族誌が記録されている。彼らの主食の内容は南北でやや異なり、南部では堅果類を主食とするのに対し、北部ではサケと堅果類を主食とする。この相違に注目した山内は、南部を西日本の縄文文化、北部を東日本の縄文文化に対比した。

ここでポイントになるサケ・マス類は、毎年定期的に群をなして母川を遡上するので、その遡上地域では重要な食料資源となり得る。氏は、このサケ・マスが存在するが故に東日本の食料資源環境は西日本より豊かであったこと、その豊かさが東日本の文化的優位性を生み出す原動力となり、東西の様々な格差を生み出したこと等を説いた。

このサケ・マス論には多くの賛同と批判が寄せられたが〔渡辺1967、松井1985、矢野2010ほか〕、ともあれ、サケ・マス論の基盤に据えられていたのは、〈西日本の食料資源環境は東日本より貧しい〉という理解であり、それ故に〈東西の縄文文化の間には様々な格差が生まれた〉とする論理であることを改めて強調しておきたい。

しかし、このいわば〈貧しき西日本〉説は必ずしも成立しない。この点を最も鮮明に立論したのが西田正規である〔西田1985〕。氏は、東日本の豊かさと西日本の貧しさという図式が、縄文時代の遺跡密度に見える東西格差につじつまを合わせる形で組み立てられてきた可能性を看取し、遺跡密

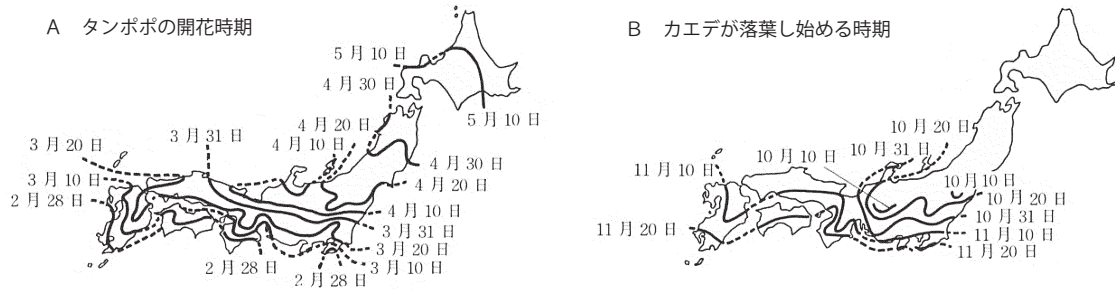


図2 季節変化の地域的差異(西田1985)

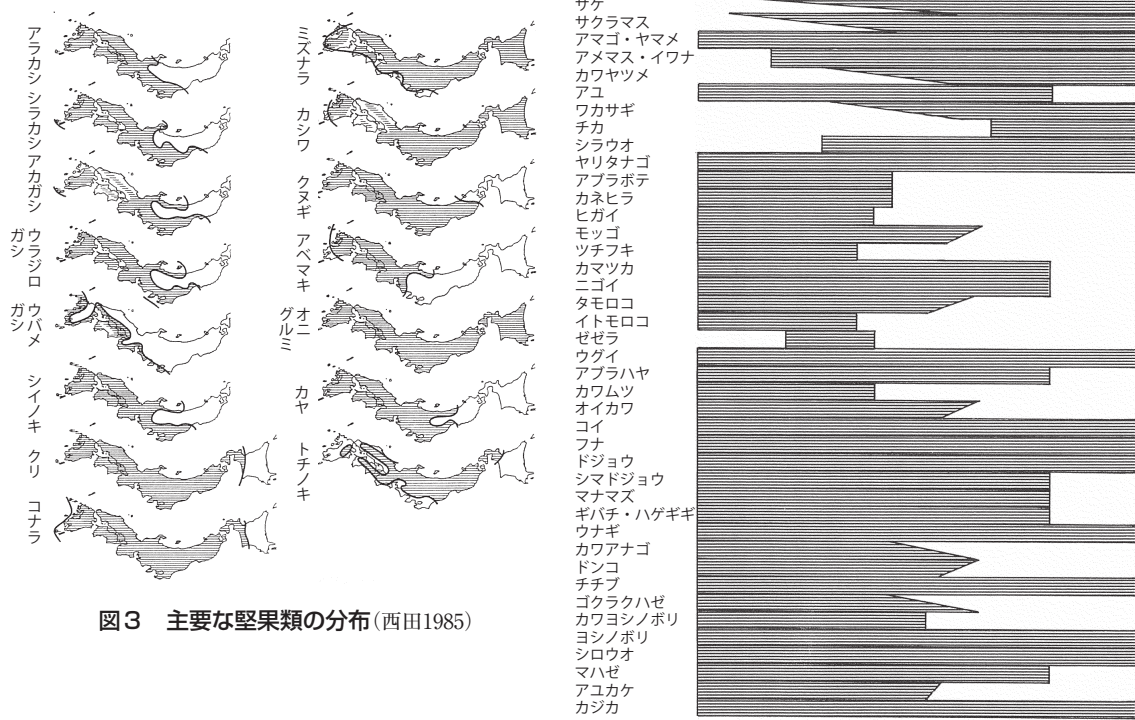


図3 主要な堅果類の分布(西田1985)

図4 主要な淡水魚類の分布(西田1985)

度から離れて東西の環境を再評価しようとした。

そこでまず氏が着目したのは、冬に対するコストの多寡である。例えば、東日本一帯のタンポポの開花日は西日本に比べて20日ほど遅れ(図2 A), 逆に東日本一帯のカエデの紅葉は20日程度早く始まる(図2 B)。従って、西日本の冬季の長さを90日程度と見積もるなら、残り275日で1日当たり0.33日分の「冬」を準備すれば良いけれど、東日本の冬季の長さは前後20日ずつ長い130日程度となるので、1日当たり0.55日分の「冬」を準備する必要がある。このように冬に対する負担に焦点をあてると、東日本の方が明らかに不利で、そのコストは西日本の1.7倍近く(0.55 ÷ 0.33 ≒ 1.66)かかってしまうことを指摘した。

また、氏は当時のメジャーフードと目される堅果類についても比較を試みた。縄文前期以降の森

林植生の主要構成種はブナ科植物だが、西日本の方が多種類で、資源利用の選択に幅があることをまず指摘した(図3)。更に1ヘクタール当たりの森林年間純生産量の推定値を比較し、落葉広葉樹林では5～10トンであるのに対して、照葉樹林は10～30トンであることを示し、照葉樹が広がる西日本の方が種類だけでなく生産量さえも多い可能性を指摘した。

更に西田は、イノシシやニホンザルの分布範囲や密度に着目し、これらについても西日本の資源量の方がむしろ多い可能性を示唆した。魚類資源も、東にはサケ・マスの世界があるけれど、西にはコイ科やアユの世界があること、魚類の種類もむしろ西日本で多いことを明示している(図4)。

以上のように、山内は東西縄文文化の差異を理解するには〈資源量の差異〉がポイントになると論じた。これに対して西田は〈資源量の差異〉はポイントではないことを説き、山内の理論的基盤に不具合があることを論じた。西田の批判が、サケ・マス類だけでなく、多様な資源を多角的に検討した結果であること、ならびに生物学や生態学の成果に基づく客観的な数値や数量的データがバックグラウンドに控えていることはここで強調しておくべきだろう。山内の〈貧しき西日本〉説とそれを核とするサケ・マス論は、汎用性のある便利な理論的基盤としては必ずしも成立しない可能性が高い。

ならば、これに替わってどのような理論的基盤を用意し、現象と向き合っていくべきだろうか。かつて山内が民族誌を紐解きながらサケ・マス論を整えたように、考古学や文化人類学における先行研究を参照していくならば、以下のような2つの途が見出せるかも知れない。

その途の1つは、〈資源の収穫期間の長さ〉に着目するものだ。ここでクローズアップされるのは、泉拓良が1985年に提起した示唆である[泉1985]。氏が着目したのは資源量ではなく、〈資源の収穫期間の長さ〉である。西田が指摘するように、東日本は生息樹種の多様性がより低い。また、秋の終わりはより早く、冬の期間もより長い。これらを考え合わせると、より短い収穫期間に、より多くの量を収穫する必要がある。そのため、短期集中型の収穫に応じた集約的な労働編成の必要性が高くなり、その分、集団規模を拡大させたり、求心的な集団構造を生み出す必要性も高くなる。

一方、西日本は生息樹種がより多様である。種ごとに結実時期は微妙にずれるので、収穫期もより分散することになる。そのため、集約的な労働編成を構築する必要性はより低く、その分、集団規模を拡大させたり、求心的な集団構造を生み出す必要性も低くなる。

泉はこの差異こそが、東西縄文文化の差異を生み出した背景だった可能性がある⁽¹⁾と論じた。その可能性を、改めていまいし問うてみよう。表1に示したデータは、国立歴史民俗博物館が公開している「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」[石田糸絵・工藤雄一郎・百原新2016]を整理したものである。縄文時代に帰属する主要な堅果類の報告事例数(1分類1事例とする)を都道府県ごとに集計し、百分率で表示した。9%以下は無色、10～24%は淡く、25%以上は濃く示してある。

概観を目的としているため、細分時期ごと・遺跡ごとの集計・分析はしておらず、その点において検討の余地があるけれども、各地域の遺跡に残された主要な堅果類の出土傾向をまず読み解くには十分な結果が見出せるだろう⁽²⁾。東西の差異は明瞭で、北海道から岐阜までの範囲における出土事例は落葉樹に偏っている。主要樹種はクリ・オニグルミ・トチノキの3種で、これらは9～10月前後の2ヶ月間に結実するものである。

対して、西日本における出土事例は多様な場合が多い。ポイントは、イチイガシ・アラカシ・シ

表1 主要な堅果類の遺跡における出土傾向(都道府県別)

都道府県	アラカシ	シラカシ	アカガシ	ウラジロガシ	ウバメガシ	イチイガシ	マテバシイ	シイノキ	クリ	コナラ	ミズナラ	カシワ	クスギ	アベマキ	オニグルミ	カヤ	トチノキ	計	n
1 北海道									34	1	8	4			49		5	100	103
2 青森									29				1		37	2	32	100	167
3 岩手									27		1		1		39		31	100	71
4 宮城									18		2	2	11		31	2	34	100	61
5 秋田									30		5				27	2	36	100	44
6 山形									26						35	9	30	100	23
7 福島	2								21	2	4		4		33	9	26	100	57
8 茨城									33				17		50			100	6
9 栃木									13						50		38	100	8
10 群馬									21	6		2	6		39	2	24	100	66
11 埼玉	3	3	9						16	3	3		7		17	12	26	100	58
12 千葉			1			3			16				1		40	10	27	100	67
13 東京	2		5					1	8		5	1	3		29	17	30	100	133
14 神奈川	2	2		4		6			10	2		2	12		22	22	16	100	50
15 新潟									25		1		1		37	4	32	100	73
16 富山									18		3				34	5	39	100	38
17 石川	1	1	7						15		1		3		28	10	33	100	72
18 福井	8			8					15						31	15	23	100	13
19 山梨									24				3		72			100	29
20 長野									22						44		33	100	9
21 岐阜									29						35	3	32	100	34
22 静岡	9			9	9	18			18						18		18	100	11
23 愛知	9	6	9			9	3		9				25		9	6	13	100	32
24 三重	9					18			18						27		27	100	11
25 滋賀	4	7	5	3		13			13			5	6		18	8	17	100	99
26 京都	4		8	4		20			20				4		8	12	20	100	25
27 大阪	11	3	5	1		17	1	2	7				4		14	13	21	100	94
28 兵庫	5	8	8			16			13				11		8	13	18	100	38
29 奈良	4	3	5			16			15				5		15	14	23	100	79
30 和歌山						33									33		33	100	3
31 鳥取			13			6			3	3			3		25	16	31	100	32
32 島根			11			11			5						21	11	42	100	19
33 岡山	13	6				25	6		6							19	25	100	16
34 山口	50					50												100	2
35 徳島		100																100	1
36 香川						17		17	17						17	17	17	100	6
37 愛媛						29			14						29	14	14	100	7
38 高知	22	11	22			11							22				11	100	9
39 福岡	7	7				43	7		3				3		13	7	10	100	30
40 佐賀	12		12			29		6	12				6		18	6		100	17
41 長崎	25		25			50												100	4
42 熊本	17	8				33			8				17		8	8		100	12
43 大分						33									33	33		100	3
44 宮崎						67				33								100	3
45 鹿児島						70			20						10			100	10
46 沖縄				50	13		25	13										100	8

■ = 10~24% ■ = 25%以上

ラカシ・アカガシといった照葉樹だけでなく、落葉樹であるクリ・オニグルミ・トチノキの3種も伴う傾向にある点だ。⁽³⁾琵琶湖周辺地域や京都府南部では、クリ・オニグルミ・トチノキの3種はやはり9～10月前後に結実する一方、イチイガシ・アラカシ・シラカシ・アカガシなどの結実期は11～12月前後にピークを迎える。その収穫期間は都合4ヶ月となり、岐阜以北のおよそ2倍になることを強調しておきたい。

より実証的な裏付け作業を追加していく必要はあるものの、上記の概観の成果を踏まえるならば、泉の見解は、西田が整理し直した東西の森林植生の特色とも整合性が高く、サケ・マス論に替わり得る有効な理論的基盤にもなり得るといえよう。種ごとの生産量は必ずしも大きくないかも知れないが、西日本の食料資源環境にはより多様な種類が存在するために集約的な労働編成を構築する必要性が低い。それが、関西縄文社会の地域的特色を支え続けていた可能性は十分想定可能である。

いま一つの途は、〈資源利用の方向性と強化の程度〉に着目して理解を進めるものである。ここでクローズアップされるのは、文化人類学者のM.サーリンズが1970年代に提起した示唆である。氏は、未開社会における労働・生産のあり方を数量的に分析し、最大のポイントはその生産様式にあること、そのあり方は2つに区分されること、その〈選択〉の結果によって未開社会の規模や形が規定されることを説いている [サーリンズ1972]。

2つの生産様式のうち、第1は〈過少生産様式〉と呼ぶべきものである。その根本的性質は、欲張らず、また財と権力の集中を社会的に許容しないところにある。欲張らないために、低い水準の豊かさで満ち足りる。⁽⁴⁾従って、労働・生産よりも余暇を優先し、資源環境の大部分を使い切らない。また同様の理由から、生産力を向上させるような技術をたとえ知っていたとしても、それを最大限には行使しようとはせず、人口規模の拡大も指向しない。生産を強化させる必要がないために、集団の求心性を高める必要も生まれず、世帯の自律性は常に優先される。結果として世帯の離反は抑制されず、集落は頻繁に分裂し、故に集落規模も拡大しない。集団の求心力を高める必要がないので、親族制は強化されず、儀式も活用されない。

第2は〈生産強化様式〉と呼ぶべきものである。その根本的性質は、財と権力の集中を社会的に許容し、それ故により多くのものを欲するところにある。高い水準の豊かさを目指すため、余暇よりも労働・生産を優先し、技術と生産力を活用して資源の利用強化を図る。生産力の向上に伴って人口は増え、また生産力の向上を目的として人口増加が更に促進される。テリトリーの開発とその資源の利用強化を進めるために、世帯の自律性よりも集団の求心性を優先・重視する。世帯の自律性に制限をかけるために、親族性を強化し、儀式も積極的に導入する。結果として集落の分裂は抑制され、集落規模も大きくなる。

この〈過少生産様式〉と〈生産強化様式〉の相違においてポイントになるのは、財と権力の集中に対する社会的なブレーキである。これが緩み、外れたとき、〈世帯の自律性〉より〈集団の求心性〉が選択され、技術と労働力の活用 ⇒ テリトリーの開発と資源の利用強化 ⇒ 集団規模の拡大 ⇒ 技術と労働力の活用・・・といった拡大再生産のサイクルが出現し、〈生産強化様式〉への展開が始まることになる。⁽⁵⁾

同様の興味深い示唆は、文化人類学の世界を少し渉猟するだけで、しばしば見出せる。例えば池谷和信は、狩猟採集社会について言及する中で、その社会の仕組みの根本には〈持つ者から持たざ

る者へ余剰を分配し、個人への財の集中と社会階層化を敢えて阻止するシステム〉があることを説いている〔池谷1995〕。故に、例えばカラハリ砂漠のサンは、貯蔵経済や農耕を知っていても積極的には選択しない。余剰に結びつきやすい貯蔵という行為は必ずしも歓迎されるものではなく、余剰を生み出しやすい食料生産もまた、狩猟採集社会にとって必ずしも好ましい資源利用形態ではないからである。

更にP.クラストルの説くところも参考になるだろう。氏は、アマゾンの族長支配体制を分析する中で、その未開社会の仕組みの根本には〈権力に対して自律性を保持しようと志向し、権力の拡大を阻止する仕組み〉があることを説いた。未開から国家への道が開かれてしまうのは権力拡大阻止の仕組みの維持に失敗したときであり、未開社会とは未発展社会ではなく、国家への発展の回避を選択し続けた社会だという〔クラストル1974〕。

以上のように、サーリンズらは、狩猟採集社会の根本的な姿の1つとして、社会の階層化や財・権力の集中にブレーキをかけ、集団の求心性より世帯の自律性を優先的に選択・保持する仕組みがあること、この社会的なブレーキが緩み、外れたとき、社会の形を大きく変容させるようなスイッチが入り、これを契機に〈資源利用の方向性と強化の程度〉に変化が生じ、併せて社会規模も拡大傾向に転じることを説いている。このような狩猟採集民の根本的な仕組みに目を向けるならば——そして縄文社会もまた狩猟採集民社会であることを踏まえるならば——、〈資源利用の方向性と強化の程度〉の変化への着目もまた、上記課題に向き合っていくための糸口になり得るだろう。

(2) 分析の論点の整理

以上、本稿で基盤とする理論や先行研究について整理を試みた。西田の多角的な検討結果を踏まえるならば、従来の理論的基盤の1つである山内のサケ・マス論は実情にあわないと見るべきだろう。一方で、〈資源の収穫期間の差異〉への着眼を示唆する泉拓良の見解や、〈資源利用の方向性と強化の程度〉への着眼を示唆するM.サーリンズの見解には、今後の理論的基盤として試行してみる価値があるように見える。

このうち、〈資源の収穫期間の差異〉については表1で概観したとおりだが、遺跡の出土資料の分析に立ち返り、地域間の比較研究を重ねていくことによって、より実証的な研究へと駒を進められるだろう。一方の〈資源利用の方向性と強化の程度〉については、関連する資料の数量的分析などから実証的な研究へと駒を進めることができるはずだ。

残念なことに、以上の作業を一度に進めることは難しい。そこで、前者の〈資源の収穫期間の差異〉に関する作業は稿を改めて進めることとし、次章では後者の〈資源利用の方向性と強化の程度〉を論点とし、問いを進めてみたい。

③……………資源利用の方向性と強化の程度の検討

(1) 作業の方針

本章の論点は、関西地方における〈資源利用の方向性と強化の程度〉を問うところにある。良好

な関連先行研究を挙げるならば、例えば今村啓爾や坂口隆などの成果を推すことになるだろう。

このうち、今村の研究は、縄文時代中期中葉から後葉における中部地方～関東地方西南部と関東地方東北部～東北地方を比較対象地域とし、打製石斧と貯蔵穴の量的なあり方を整理したものである〔今村1989〕。結果、中部地方～関東地方西南部では打製石斧が著しく増加するのに対し、関東地方東北部～東北地方では貯蔵穴が著しく増加する傾向を明らかにし、前者では根茎類の利用が強化され、後者では堅果類の利用が強化されたと説き、資源の利用強化の方向性が地域ごとに異なることを論じた。

坂口は、全国的視野をもって堅果類貯蔵穴を検討し、その容量に見える傾向などを数量的に分析した。結果、西日本における個々の貯蔵穴容量は東日本に比べて小さいこと、堅果類貯蔵の程度は地域ごとに異なることなどを改めて明らかにしている〔坂口2003〕。

以上のように、打製石斧や貯蔵穴を用いた数量的分析は、資源利用の方向性と強化の程度を明らかにし、地域的な特色や差異なども説き起こすことができる。これに磨製石斧の数量的分析も併せることで、森林開発も視野に入れた議論が可能になるだろう。そこで本章では、これらの3つの資料——打製石斧・磨製石斧・貯蔵穴——の数量的な分析を試みることにする。

なお、本章の目的は、資源利用の方向性と強化の程度から関西縄文社会の地域的特色を把握するところにある。そのためには、全国的視野に立った定性的・定量的な比較検討が望ましいが、広範で膨大な資料を解析する必要があるため、現状ではまだ甚だ難しい。そこで本稿では、関西地方とこれに隣接する北陸・東海地方西部を最初の検討対象とし、その比較検討を通してそれぞれの地域的特色をまずあぶり出すことにする。そして、その成果をステップ⁽⁵⁾にしながら全国的視野に立った先行研究を参照し、その位置付けを理解していくことにしたい。

表2 時期区分

大別	細分	土器型式
縄文時代早期	前葉	ネガティブ押型文土器群
	中葉	ポジティブ押型文土器群
	後葉	条痕文系土器群
縄文時代前期	前葉	羽島下層Ⅰ式・清水ノ上Ⅰ式
	中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式
	後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式
縄文時代中期	前葉	船元Ⅰ式
	中葉	船元Ⅱ～Ⅳ式
	後葉	里木Ⅱ式～北白川C式
縄文時代後期	前葉	中津式～北白川上層Ⅱ期
	中葉	北白川上層Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式
	後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
縄文時代晩期	前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式
	後半	篠原式～長原式
弥生時代		

分析に際して用いる時期区分は、原則として表2のとおりとする。検討対象地域のうち、北陸・東海地方西部とは現在の三重・愛知・岐阜・福井の4県を指し、関西地方とは滋賀・京都・兵庫・奈良・大阪・和歌山の2府4県を指すこととする。各時期の打製石斧や磨製石斧、貯蔵穴、住居、その他の遺構の数は、基本的に関西縄文研究会、岩瀬彰利、春日井亘、長谷川幸志が行った各種の資料集成をもとに集計する [関西縄文文化研究会 1999～2004・2006, 岩瀬 1997, 春日井・長谷川 2003]。

(2) 打製石斧数の推移と地域的差異

分析の対象と方法 第1の分析対象は打製石斧である。北陸・東海地方西部と関西地方の資料数の推移を整理し、資源利用の方向性と強化の程度、その地域的特色などについて検討したい。

ここでは打製石斧の数的変化を問題とするが、単純に時期ごとの打製石斧数をカウントしてもあまり意味はない。というのも、その数は打製石斧の利用強化とは関係なく、遺跡数や人口の増減によって変動する場合もあるからだ。打製石斧の利用強化そのものを知るためには、例えば人口1人当たりや1世帯当たりの数値を求め、その変動を問題にするのが望ましい。考古資料においてその実態を示す値を求めることは不可能だが、ここでは便宜的に住居1棟当たりの打製石斧数を算出し、これを〈1世帯当たりの打製石斧数〉とみなした上で分析することにした。

使用痕跡等から見て、打製石斧の用途は土掘り用具だと考えられる。使用された主な場面としては、例えば(A) 竪穴住居や柱穴、土坑をはじめとする諸遺構の掘削、(B) 栽培植物の耕作や根茎

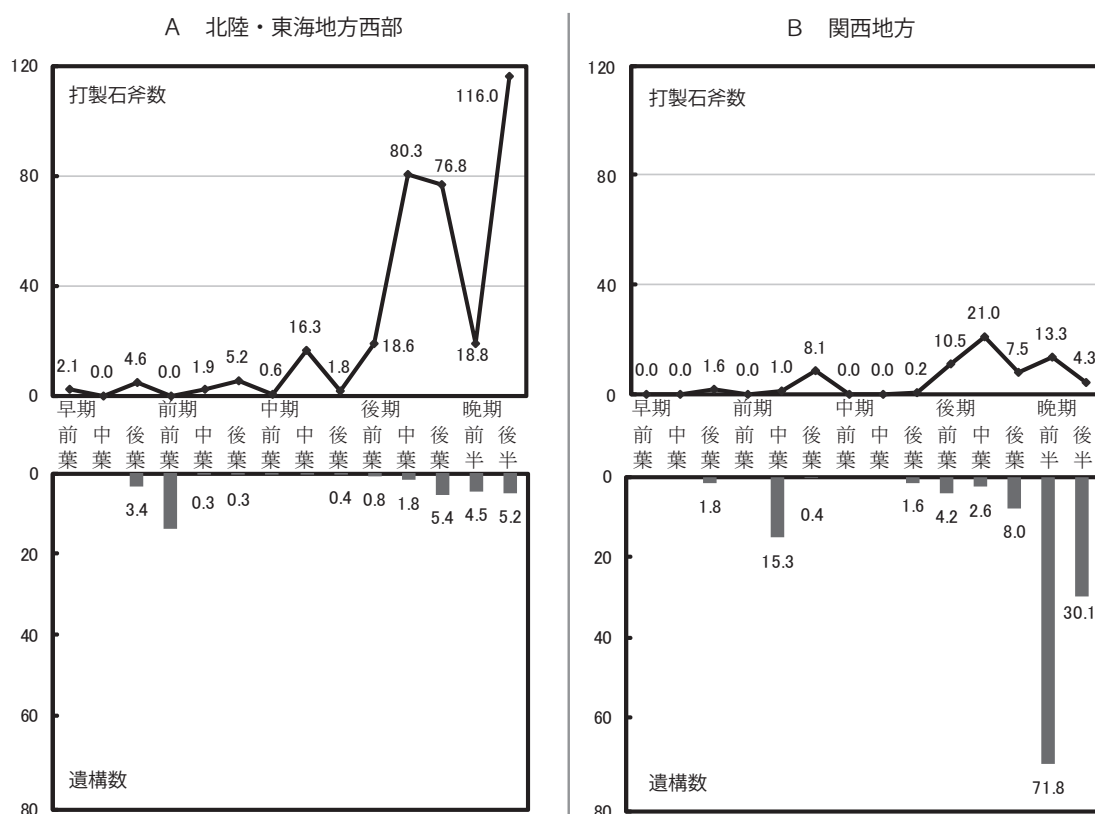


図5 住居1棟あたりの打製石斧数と遺構数の推移(瀬口2009一部改変)

類の移植・採集などが想定されるだろう。議論を進めるためには、可能な限り上記（A）と（B）を弁別する必要があるが、その作業を厳密に実施することは難しい。ただ、後で示すように遺構数の増減と打製石斧数の増減の相関関係を整理することで、ある程度の見込みを示すことは可能だろう。そこで、上記と同様な方法で〈1世帯当たりの遺構数〉を算出し、先に求めた〈1世帯当たりの打製石斧数〉の推移と考え合わすことで理解を進めていきたい。

各地域における傾向 北陸・東海地方西部における〈1世帯当たりの打製石斧数〉の推移は図5 A上段のとおりである。後期前葉までのその値は、中期中葉に16.3本、後期前葉に18.6本といった値が算出され、変動が見出せるものの、全体的にまだごく少ない傾向にある。変化の画期は後期中葉にある。この時期に値は急増しており、打製石斧の利用強化が著しく進んだ可能性が窺える。

この現象の理解を進めるために、同地域における〈1世帯当たりの遺構数〉を算出し、その推移をグラフ化した。その結果は図5 A下段のとおりだが、〈1世帯当たり〉の遺構数と打製石斧数の推移は必ずしも相関しない。勿論、一部の打製石斧は上記（A）のような諸遺構の掘削に用いられたに違いないが、増加したものの多くは上記（B）で挙げたような根茎類の移植・採集の強化、あるいはマメ類などの耕作の強化にまわされていた可能性が高いと考えられる。この点については後で補足を試みよう。

一方、関西地方における推移は図5 B上段に示したとおりである。その値は後期前葉以降に増加傾向へ転じているものの、増加の程度はごく小さく、変化も緩やかな点で、北陸・東海地方西部の傾向とは大きく異なる。北陸・東海地方西部と比べて、関西地方の打製石斧の利用は、時期を通じて全体的に過少で、それをを用いた資源利用も目立たない傾向にあったと見て良いだろう。

(3) 磨製石斧数の推移と地域的差異

分析の対象と方法 第2の分析対象は磨製石斧数である。ここでは、磨製石斧を伐木ならびに木材加工の用具として論を進めることとし、前節と同様に住居1棟当たりの磨製石斧数の値に着目する。

各地域における傾向 北陸・東海地方西部における推移は図6 Aのとおりで、画期は後期中葉に

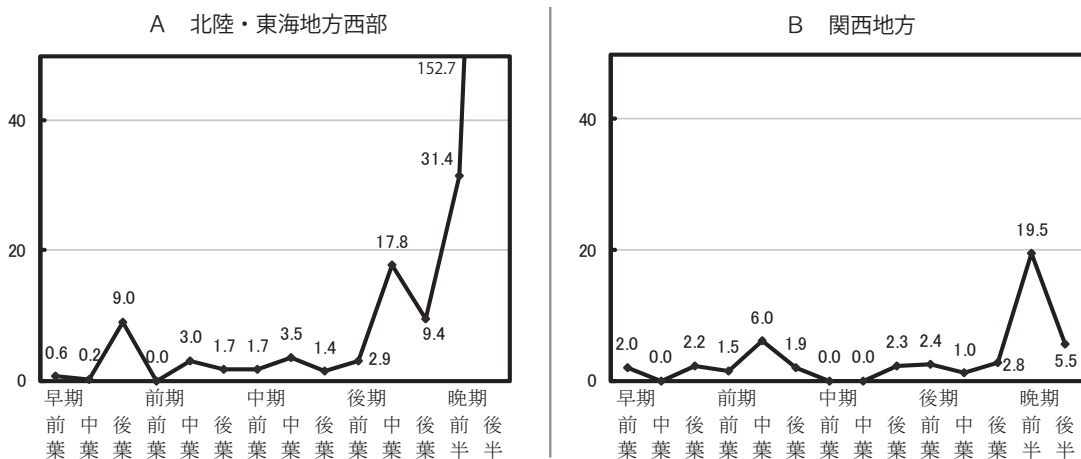


図6 住居1棟あたりの磨製石斧数の推移(瀬口2009一部改変)

ある。それ以前の〈1世帯当たりの磨製石斧数〉は0～3本程度を基調とするもので、早期後葉に3倍程度の増加が見られるものの一次的な変化に留まり、比較的低い水準で推移する。顕著で明確な変化が起きたのは後期中葉で、その値は急激に増加した。後期後葉に値が一時的に減少するものの、晩期前半、後半へと更に大きく増加する傾向も見て取れる。

磨製石斧が使用された場面としては、(A)住居建築材などの伐りだし・加工のほか、左記以外の行為——例えば(B)焼畑や耕地開拓に伴う森林開発などが想定される。ここでは住居1棟当たりの値の推移を問題にしたので、住居1棟にまつわる部材の数や部材の細かい加工などに極端な増減がない限り、(A)に伴う磨製石斧の増減を想定する必要はないだろう。従って、見出された値の推移は、上記(B)の増減を中心に据えて検討すべきである。この点については、打製石斧の数的変化も勘案しながら後述したい。

一方、関西地方における推移は図6Bのとおりである。前期中葉、晩期前半に増加が見られるが、いずれも一次的な変化に留まり、後期中葉以降の増加規模も小さいといった点で、北陸・東海地方西部の傾向とは大きく異なる。関西地方における〈1世帯当たりの磨製石斧数〉が最も多いのは晩期前半で、その値は19.5本だが、それでも北陸・東海地方西部の同時期の値の2/3に過ぎない。北陸・東海地方西部と比べ、関西地方の磨製石斧の利用状況は、時期を通じて全体的に過少な傾向にあると見て良いだろう。

(4) 貯蔵穴容量の推移と地域的差異

分析の対象と方法 第3の分析対象は貯蔵穴である。前節と同じ対象地域の資料について、遺構の規模から算出される容量の時的推移と地域的差異を整理したい。ここでは、貯蔵穴を主として堅果類の貯蔵施設として論を進めることとし、前節と同様に住居1棟当たりの値に着目する。なお、個々の容量については、坂口隆のようにエリアカーブメーターを用いて算出する方法もある〔坂口2003〕が、ここでは平面規模×深さで概算した値とする。

各地域における傾向 北陸・東海地方西部における推移は図7Aのとおりである。後期中葉に急増するが、一次的な傾向に留まり、ほぼ一貫して低い水準で推移する。

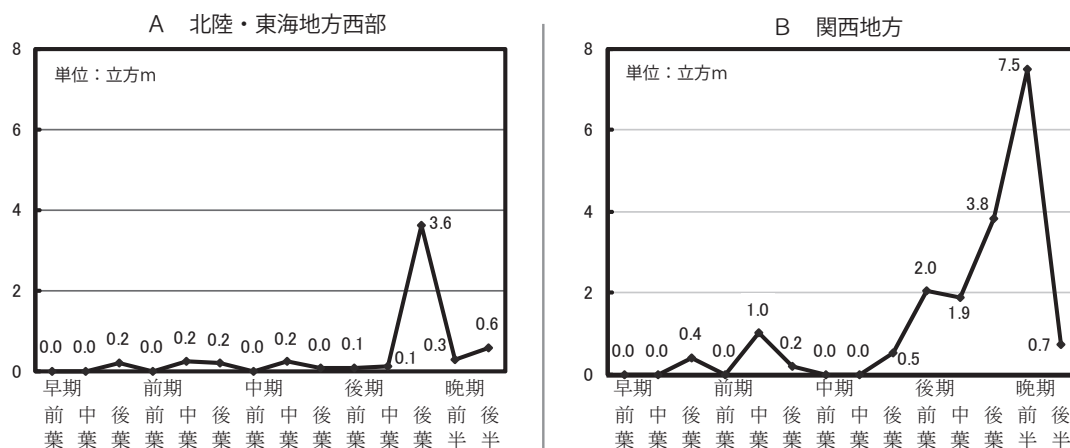


図7 住居1棟あたりの貯蔵穴容量の推移(瀬口2009一部改変)

一方、関西地方における推移は図7Bのとおりである。前期中葉に増加傾向が見られるが、一次的な変化に留まる。画期となるのは後期前葉で、以降、晩期前半まで大きく増加していく。北陸・東海地方西部に比べ、後期前葉以降の関西地方では貯蔵穴の利用が著しく強化されたことが窺える。

(5) 分析の総括と展開

北陸・東海地方西部の地域的特色 以上、資源利用の方向性と強化の程度、そこから見出せる地域的な特色と差異を問うべく、3つの資料の数量的分析を行った。本節では、ここまでの成果を総括し、先行研究を踏まえながら理解を深めたい。

まず、北陸・東海地方西部の地域的特色は、住居1棟当たりの打製石斧と磨製石斧の数が軌を一にして後期以降に大きく増加する反面、堅果類の貯蔵穴の量的変化は一時的な増加を除くと目立たないところにあり、これらの点で関西地方と大きく異なる。

ここで参照すべき先行研究は、小畑弘己のマメ科植物に関する検討結果だろう [小畑2011]。従来、縄文時代のメジャーフードの候補としては、堅果類や根茎類が挙げられてきた。根茎類をメジャーフードの1つに挙げる資料的背景としては、遺存体そのものの検出・確認というよりは、打製石斧の大量出土がある。同時に、この打製石斧の大量出土は根茎類の移植・栽培の可能性をも示唆するものとして位置付けられてきている [渡辺1975, 今村1989]。一方、マメ科植物に関しては、その出土量が少ないために縄文社会のメジャーフードに数えられることはほとんどなかった [藤尾2003]。

そのような研究状況の中、小畑は炭化資料や土器への圧痕資料に着目し、マメ科植物の集成・分析を進めた。その結果、(1) マメ科植物としてはダイズ属種子・アズキ亜属種子が確認できること、(2) その確認例はいまなお増加中で、2011年の段階において64遺跡78例にのぼること、(3) 事例数は中期を境にして増大すること、(4) 中部地方を中心とした地域では、それと軌を一にしてマメ科植物の栽培徴候群 (=サイズの大型化) が顕在化し、また同時に打製石斧も著しく増加することなどを指摘している。そして、特に中期以降の打製石斧は、根茎類の移植・栽培だけではなく、マメ科植物の栽培用具として利用強化された可能性が高いこと、マメ科植物はもはや確認例の少ないマイナーな資源ではなく、メジャーフードの1つに位置付けられること等も併せて説いている。

本稿に関連して更に注目すべき点は、打製石斧の増加に対する評価だろう。小畑は、マメ科植物関連資料と打製石斧の出土傾向の相関性から見て、「これらの道具の急激な量的増加は、そのような多量の道具を大量に消費する新たな作業が付加(強化)された」結果であり、「それはやはり新たな土地の開墾と維持」に関連するものだと説き、急激に増加した打製石斧の用途は「焼畑や半栽培の素地の形成」に「畠の造成・管理」を含めたものだと論じた。

本稿で対象にしている北陸・東海地方西部では、残念ながら、一部を除いて土器圧痕資料の検討がまだ十分ではない。そのため、関東地方西部～中部地方で小畑が試みたようなマメ科関連資料のあり方と打製石斧数の相関性から議論を展開することはまだ難しいだろう。

しかし、ここで強調しておきたいのは、北陸・東海地方西部では、打製石斧の増加とともに磨製石斧も著しく増加している点である。周知のとおり、焼畑ではただ単に森林に火を付ければ良いわ

けではない。森林を斧で伐り開き、生木を減らしてから火をかける必要がある。また、ある程度の収量を期待するならば、マメ科植物であってもただ播種するだけでなく、根を深く張らせるために深く耕す必要がある [小畑 2011, 135 頁]。以上の点を踏まえるならば、北陸・東海地方西部における打製石斧と磨製石斧の急激な増加もまた、例えば焼畑にまつわる作業が付加・強化されたことを示唆としている可能性は高い。根茎類の移植・栽培を主とするのか、マメ科植物の栽培を主とするのか、これらをより厳密に弁別していく作業は今後の課題だが、いずれにしろ後期以降の北陸・東海地方西部では、土地・森林の改変を伴う方向で資源の利用強化が進行したことを看取できるだろう。

関西地方の地域的特色と位置付け 対する関西地方の地域的特色は、打製石斧・磨製石斧の量的変化が目立たない一方で、住居 1 棟当たりの貯蔵穴容量が後期以降に大きく増加するところにあり、これらの点で北陸・東海地方西部と大きく異なる。

では、関西地方における打製石斧と磨製石斧の数はなぜ目立って増加しなかったのだろうか。この点を問い直しておくために、小畑の先行研究を再び参照したい。

氏は、マメ科植物の作物学的特性に着目し、打製石斧の利用強化に関する地域的差異に関して若干の考察を加えている [小畑 2011]。氏が着目したのは土壤の性質である。例えばダイズの生育には多量の窒素を要するので、その栽培好適地は窒素肥沃度が高い地域が相当することになる。ポイントは、そのような土地は極めて限定されていると考えられる点だ。

この点を重視した小畑は、栽培好適地ではマメ科植物栽培型の資源利用を採用できたが、それ以外の窒素肥沃度が低い地域では採用できず、従来の野生植物依存型を継承せざるを得なかったと説き、結果、かつて今村啓爾が指摘したような関東地方西部～中部地方の〈打製石斧増加型〉と関東地方東南部の〈貯蔵穴増加型〉のような地域的差異 [今村 1989] が生まれたと論じた。

上記の小畑の論理を踏襲するならば、関西地方において打製石斧と磨製石斧の利用強化が進行しなかった理由は土壤の問題に帰することになる。北陸・東海地方西部に比べて、関西地方は窒素肥沃度が低かったため、マメ科植物栽培型へ移行できず、従来の堅果類依存型を継承しつつ、その貯蔵を強化するだけに留まったとする理解が生まれることだろう。

しかし、この点に関しては検討の余地がある。例えば、延喜式によれば近江・丹波・但馬などはダイズの産地としてその生産物を貢納している [吉川弘文館 1955]。また、明治時代末年から大正時代前半期になると、我が国でも信頼できる統計資料が政府によって整備されるが、その頃に作成された作付面積当たりのダイズとアズキの収穫量の推移を整理・分析すると、関西地方の作付面積当たりの収穫高はいずれも高く、国内トップクラスの産地だったことなどが見出せる [表 2・3 東京統計協会 1913]。

後者のデータは近世・近代に農法が大きく改善された後のものであり、その点は考慮に入れるべきだが、それでも関西地方が必ずしもマメ科植物の栽培に適していなかったとはみなし難い。この地域の縄文社会は、選択しようと思えばできたにも関わらず、大量の打製石斧・磨製石斧を用いて土地や森林を改変する方向を選択しなかったと見るべきであり、それよりも敢えて土地・森林の恵みをそのまま享受する方向を選択し、堅果類の貯蔵を強化していたと捉えるべきである。

ただし、その貯蔵強化の程度については、全国的視野から位置付け直す必要があるかも知れな

表3 一反当たりの大豆・小豆の収穫高(単位:石 1911~1917・1919~1921年)

No	都道府県	A 大豆											B 小豆												
		1 9 1	1 9 2	1 9 3	1 9 4	1 9 5	1 9 6	1 9 7	1 9 8	1 9 9	1 9 0	1 9 1	平均	順位	1 9 1	1 9 2	1 9 3	1 9 4	1 9 5	1 9 6	1 9 7	1 9 8	1 9 9	1 9 0	1 9 1
1	北海道	0.9	0.7	0.3	1.0	0.9	0.9	0.9	0.8	0.9	0.9	0.82	27	0.8	0.8	0.2	0.9	0.9	0.8	0.9	0.7	0.9	1.0	0.78	9
2	青森	0.8	0.6	0.4	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.75	34	0.6	0.6	0.4	0.6	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	0.7	0.64	28
3	岩手	0.7	0.5	0.3	0.8	0.8	0.7	1.0	1.5	1.2	1.2	0.87	19	0.6	0.4	0.3	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7	0.56	40
4	宮城	0.8	0.5	0.3	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.73	39	0.6	0.4	0.3	0.7	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.54	43
5	秋田	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.4	0.6	0.7	0.7	0.7	0.62	46	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5	0.5	0.46	46
6	山形	0.8	0.9	0.7	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.9	0.8	0.78	29	0.6	0.7	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.59	36
7	福島	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	1.3	0.8	0.8	0.86	21	0.7	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.63	30
8	茨城	0.6	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.7	0.8	0.9	0.9	0.78	30	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7	0.66	25
9	栃木	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9	0.9	0.84	26	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9	0.7	0.7	0.73	
10	群馬	0.7	0.8	0.7	0.8	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.75	32	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.61	33
11	埼玉	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	0.6	0.9	0.8	0.8	0.8	0.77	33	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.60	34
12	千葉	0.7	0.9	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	0.9	0.88	16	0.6	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.7	0.75	
13	東京	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.77	32	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.8	0.70	20
14	神奈川	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	0.8	0.73	38	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.7	0.7	0.7	0.9	0.7	0.64	29
15	山梨	1.0	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.9	0.9	1.0	0.9	0.85	25	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8	0.8	0.7	0.68	24
16	長野	0.8	0.9	0.6	0.9	0.7	0.9	0.8	1.0	1.0	1.0	0.85	24	0.7	0.6	0.3	0.6	0.5	0.5	0.3	0.7	0.6	0.8	0.57	37
17	静岡	0.7	0.9	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9	0.9	1.0	0.8	0.86	23	1.2	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	1.0	0.8	0.8	0.8	0.83	6
18	新潟	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.8	0.9	0.9	0.75	35	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.59	35
19	富山	1.2	1.1	1.0	1.0	1.2	1.1	1.1	1.1	1.2	1.0	1.11	4	0.9	0.8	0.8	0.7	0.9	0.8	0.7	0.8	0.9	0.7	0.79	8
20	石川	1.0	0.9	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.1	1.2	1.1	1.03	7	0.8	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	0.77	10
21	福井	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.0	1.1	1.2	1.1	1.09	5	0.8	0.8	0.8	0.6	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.7	0.77	11
22	岐阜	0.9	0.8	0.8	0.9	0.9	0.8	0.8	0.9	0.9	0.9	0.86	22	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.65	26
23	愛知	0.9	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	1.0	1.1	0.9	0.87	17	0.8	0.7	1.1	0.8	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.8	0.80	7
24	三重	0.9	0.9	0.7	0.9	0.9	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	0.87	18	0.8	0.8	0.6	0.7	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.7	0.73	17
25	滋賀	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.01	9	0.8	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.8	0.76	12
26	京都	0.9	0.9	0.9	0.7	0.9	0.9	0.9	1.0	1.0	1.1	0.92	12	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.9	0.7	0.74	16
27	大阪	1.2	1.2	1.2	1.3	1.2	1.2	1.3	1.3	1.4	1.1	1.24	1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0	1.0	0.9	0.98	1
28	兵庫	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.91	13	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.69	21
29	奈良	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.3	1.2	1.3	1.2	1.22	2	0.9	1.0	0.9	1.0	1.0	0.9	0.9	0.9	1.0	1.0	0.95	3
30	和歌山	0.9	1.0	0.9	0.9	1.0	1.0	1.0	1.1	1.3	1.1	1.02	8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.8	0.7	1.0	1.1	0.9	0.85	4
31	鳥取	1.0	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	1.1	1.0	1.1	1.0	0.98	11	0.7	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.7	0.8	0.9	0.8	0.74	15
32	島根	0.7	0.6	0.7	0.7	0.8	0.8	0.7	0.9	1.0	0.9	0.77	31	0.6	0.4	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.57	39
33	岡山	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9	1.0	1.0	1.0	0.90	14	0.7	0.7	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7	1.0	0.7	0.68	23
34	広島	1.0	1.1	1.0	0.8	1.0	1.0	1.0	1.2	1.1	1.0	1.04	6	0.8	0.8	0.8	0.9	0.8	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	0.85	5
35	山口	0.7	0.7	0.8	0.6	0.7	0.9	0.7	0.7	0.7	0.7	0.72	40	0.6	0.7	0.7	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.61	32
36	徳島	1.0	0.7	0.7	0.9	0.9	1.1	1.1	1.2	1.1	1.3	1.00	10	0.6	0.6	0.5	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.9	0.70	19
37	香川	1.1	0.9	1.0	1.0	1.1	1.3	1.2	1.2	1.2	1.2	1.13	3	0.9	1.0	1.6	0.8	0.9	1.0	0.8	0.9	1.0	0.9	0.97	2
38	愛媛	0.6	0.6	0.7	0.5	0.6	0.8	0.7	0.8	0.8	0.8	0.70	42	0.4	0.5	0.5	0.3	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.50	45
39	高知	0.7	0.8	0.8	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.69	43	0.8	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.62	31
40	福岡	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.66	45	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.6	0.5	0.51	44
41	佐賀	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.8	0.7	0.8	0.7	0.7	0.71	41	0.2	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.56	41
42	長崎	0.4	0.7	0.8	0.5	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.68	44	0.3	0.7	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.55	42
43	熊本	0.7	0.7	0.7	0.5	0.7	0.9	0.8	0.9	1.0	0.9	0.79	28	0.6	0.6	0.7	0.4	0.6	0.7	0.6	0.8	0.8	1.0	0.69	22
44	大分	0.8	0.8	1.0	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9	1.0	0.9	0.89	15	0.7	0.7	0.8	0.6	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.74	14
45	宮崎	0.8	0.8	0.9	0.8	0.9	1.0	0.9	0.8	0.9	0.9	0.87	20	0.7	0.7	0.7	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.65	27
46	鹿児島	0.7	0.7	0.9	0.5	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.74	37	0.6	0.6	0.6	0.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.57	38
47	沖縄	0.5	0.5	0.5	0.3	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.50	47	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3	0.2	0.2	0.1	0.2	0.3	0.20	47
平均		0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9	0.9	0.9	1.0	0.9	0.85		0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.67	

※ =全国順位 10位まで。 =全国順位 11～20位。 =全国順位 10位まで。 =全国順位 11～20位。

い。この点を整理・確認するために、全国を対象に縄文時代の貯蔵穴を分析した坂口隆の先行研究を参照したい [坂口2003]。表4と表5は、氏の緻密な集計結果をベースとし、その一部を整理し直したものである。このうち表4には遺跡ごとのデータを整理した。No.1～48に東日本、No.49～85に西日本の遺跡のデータを配し、それぞれ草創期から晩期にかけて、大まかな時期ごとに並べ

表4 貯蔵穴容量の時期的推移と地域的差異1(坂口2003より改変)

No.	所在地	遺跡名	時期	①容量平均値(立方m・■=0.2)	平均	②計測対象数(■=5※)	平均	③ ①×②(■=10※)	平均
1	新潟	卯ノ木南	草創期	1.0	1.0	1	1.0	1.0	1.0
2	北海道	中野B	早期	4.2	1.7	11	5.0	46.2	12.6
3	北海道	川波B	早期	2.1		4		8.3	
4	青森	鶴ヶ鼻	早期	1.0		5		5.0	
5	青森	蛭沢	早期	1.1		3		3.2	
6	岐阜	打越	早期	0.1		2		0.2	
7	福島	原	早期未葉~前期前葉	0.6	1.3	5	12.6	3.0	24.0
8	宮城	北前	前期	1.8		4		7.3	
9	福島	胃宮西	前期	1.1		4		4.2	
10	福島	鹿島	前期	0.2		3		0.5	
11	富山	安田古宮	前期	0.5		2		0.9	
12	長野	荒神山	前期	0.6		7		4.2	
13	北海道	ハマナス野	前期後半	2.1		10		21.0	
14	青森	畑内	前期後半	2.2		29		63.8	
15	秋田	池内	前期後葉	1.9		20		38.0	
16	秋田	杉沢台	前期後半	2.3		42		96.6	
17	長野	扇平	前期末~中期初頭	0.6	2.2	9	16.5	5.4	41.0
18	富山	不動堂	中期	0.8		1		0.8	
19	北海道	栄浜1	中期	4.0		22		88.0	
20	岩手	西田	中期	2.9		32		92.8	
21	福島	妙音寺	中期	3.0		38		114.0	
22	茨城	諏訪	中期	2.3		7		16.1	
23	栃木	品川台	中期前葉	2.6		9		23.4	
24	栃木	山苗代A	中期前葉	1.6		23		36.8	
25	秋田	大畑台	中期前葉	3.0		5		15.0	
26	福島	法正尻	中期中葉	3.6		28		100.8	
27	北海道	白尻B	中期後葉	2.0		7		14.0	
28	青森	富ノ沢(2)	中期後半	2.9		13		37.7	
29	岩手	大畑II	中期未葉	2.0		15		30.0	
30	山形	吹浦	前期・中期	2.5		42		105.0	
31	福島	中平	中期未葉	1.5		17		25.5	
32	福島	北向	中期後葉	0.7		19		13.3	
33	茨城	墨木戸	中期後葉	2.9		6		17.4	
34	東京	伊奈砂沼	中期後葉	0.7		4		2.6	
35	東京	北江古田	中期後葉~後期前葉	0.2	1.2	27	15.1	5.4	16.6
36	愛知	朝日	後期	0.5		1		0.5	
37	三重	森脇	後期	1.3		8		10.2	
38	青森	田面木平	後期前葉	1.9		16		30.4	
39	青森	蛭沢	後期前半	1.3		47		61.1	
40	青森	上尾岐(2)	後期前葉	1.2		14		16.8	
41	秋田	腹轍の沢	後期前葉	3.3		6		19.8	
42	東京	野川中州北	後期前葉	1.5		7		10.5	
43	神奈川県	山田大塚	後期前葉	1.6		11		17.6	
44	長野	栗林	後期前葉	0.7		29		20.3	
45	静岡	坂田北	後期後葉	0.0		2		0.1	
46	石川	ダイクボウ	後期~晩期前半	0.5		13		6.5	
47	秋田	彦ヶ長根	晩期	1.2	1.3	16	8.5	19.2	10.3
48	福島	下谷ヶ地平C	晩期	1.3		1		1.3	
49	鹿児島	東黒土田	草創期	0.1	0.1	1	1.0	0.1	0.1
50	熊本	曾畑	前期	0.2	0.7	28	9.0	5.6	2.9
51	長崎	伊木力	前期	0.5		4		1.8	
52	福岡	湯納	前期	0.1		2		0.2	
53	兵庫	神嶽山	前期	2.0		2		4.0	
54	鳥取	目久美	中期	0.2	0.6	30	11.4	6.0	3.5
55	大阪	更良園山	中期	0.1		1		0.1	
56	熊本	黒橋	中期	1.8		2		3.5	
57	長崎	名切	中期	0.3		22		6.6	
58	熊本	西園台	中期前葉	0.6		2		1.1	
59	兵庫	本庄町	後期	0.2	0.7	6	11.5	1.0	7.9
60	奈良	平城京左京三奈五坊三坪	後期	1.1		1		1.1	
61	滋賀	穴太	後期	0.3		2		0.6	
62	兵庫	楠・荒田町	後期	0.3		1		0.3	
63	岡山	津島園大	後期	0.4		8		3.2	
64	鳥取	栗谷	後期	0.4		5		2.0	
65	佐賀	坂の下	後期	1.5		1		1.5	
66	長崎	中島	後期	0.6		4		2.3	
67	島根	九日田	後期初頭	0.4		19		6.8	
68	岡山	津島園大	後期前葉	0.2		12		2.4	
69	大分	龍頭	後期前葉	0.8		48		38.4	
70	福岡	野多目括渡	後期初頭	3.4		10		34.0	
71	兵庫	佃	後期後葉	0.2		8		1.9	
72	兵庫	佃	後期後葉	0.5		14		6.7	
73	山口	岩田	後期~晩期前半	0.5		33		16.5	
74	奈良	寺界道	晩期	1.5	0.5	2	7.7	2.9	4.3
75	岡山	宮の前	晩期	1.3		10		13.0	
76	岡山	津島園大	晩期	0.1		4		0.4	
77	岡山	津島園大	晩期	0.3		3		0.9	
78	岡山	普生小学校裏山	晩期	0.2		4		0.7	
79	岡山	舟津原	晩期	0.5		1		0.5	
80	岡山	南方前池	晩期	0.3		3		0.8	
81	鳥取	枇杷谷	晩期	0.0		2		0.1	
82	愛媛	船ヶ谷	晩期	0.1		1		0.1	
83	長崎	黒丸	晩期	0.4		53		21.2	
84	鹿児島	上加世田	晩期	0.1		2		0.2	
85	奈良	布留	晩期中葉	1.5		7		10.5	

た。表5はそれを改めて集計し、時期ごとの平均値を示したものである。

表4の①に示したデータは、各遺跡における貯蔵穴の容量の平均値である。東西の差異は明瞭で、東日本の事例は1.0立方mを越えているものが大半を占めている。対して、西日本の事例では平均値が1.0立方mを超えるものは限られている。このデータをもとにして、時期ごとの平均値を整理すると、表5の①のとおりとなる。坂口が既に指摘しているように、西日本の値はどの時期も東日本の半分以下であることが理解できよう。

表4の②に示したデータは、①で扱った遺跡において検出された貯蔵穴の数である。カウントした貯蔵穴は容量を計測できた例に限られており、削平や切り合いによって計測できなかった貯蔵穴は含んでいない。その点において正確とはいえないが、それでも各遺跡における貯蔵穴群の規模を大まかに比較することはできるだろう。

このデータをもとにして時期ごとの平均値を整理すると、表5の②のとおりとなる。その値を比較する限り、東西の差異は決して大きくない。ただし、表4の②で示すように個別の遺跡に着目すると、その差異はやはり明瞭である。東日本では前期以降に規模の拡大傾向がより明瞭に表れている。対して、西日本では5基に満たない小規模な遺跡がやはり目立つ。

表4の③に示したデータは、上記①に②を乗じた値である。これも計測できた遺構しか集計に含んでいないので、厳密な値とはいえないが、各遺跡の貯蔵容量の合計値を大まかに比較することはできるだろう。この表が示すように、東西の差異は歴然としており、特に前期後半以降の値には大きな格差が見出せる。このデータをもとにして時期ごとの平均値を整理すると表5の③のとおりとなる。これを比較すると、前・中期の場合、西日本における遺跡ごとの平均的な貯蔵量は、東日本のおよそ1/8～1/10に過ぎず、後・晩期の場合でも、およそ1/2の量に留まることが見出せるだろう。

前節で述べたように、関西地方では後期以降に堅果類の貯蔵を強化し、住居1棟当たりの貯蔵容量を大きく増加させていた。これは関西縄文社会における資源の利用強化の方向性を示す重要な特徴である。ただし、全国を視野に数量的分析を試みた坂口隆の成果を参照する限り、その諸数値は東日本地域に比べて低い水準に留まっていた。この点もまた、関西縄文社会における資源の利用強化の程度を示す傾向として、改めて強調しておく。

小結 以上をまとめたい。本章の論点は、関西地方における〈資源利用の方向性や強化の程度〉とその地域的特色を問うところにあった。そのために1世帯当たりの打製石斧数・磨製石斧数・貯蔵穴容量とその時期的推移を取り上げ、地域的特色をより明らかにするために北陸・東海地方西部をはじめとする東日本との対比を試みた。その結果は以下のとおりである。

北陸・東海地方西部では、縄文後期に1世帯当たりの打製石斧と磨製石斧の数を激増させていた。これは土地・森林の改変を伴う方向で資源の利用強化を進めていた結果だと考えられる。小畑の示唆を積極的に取り入れるならば、強化の具体的内容には「焼畑や半栽培の素地の形成」に「畠の造成・管理」が含まれていたことも想定される。

一方の関西地方では、打製石斧・磨製石斧を一定量保有し、その1世帯当たりの数量は後期以降に増加するものの、北陸・東海地方西部に比べるとその程度は著しく低いものであり、土地・森林の改変を伴う方向での資源利用の強化の程度は相対的に相当低かったと見られる。彼らがより積極的に選択し、強化したのは「焼畑や半栽培の素地の形成」や「畠の造成・管理」などではなく、森林

る。このような狩猟採集民の根本的な仕組みに着目するならば、〈資源利用の方向性と強化の程度〉の変化もまた、上記課題に向き合っていくための糸口になり得る可能性が見出せた。

そこで前章では、実証的な作業として、打製石斧・磨製石斧・貯蔵穴の数量的分析から関西地方の〈資源利用の方向性と強化の程度〉を検討し、隣接する北陸・東海地方西部の傾向や、東日本地域の傾向と比較を進めた。

その結果、後期以降の北陸・東海地方西部では、打製石斧や磨製石斧が大量に用いられ、小畑弘己の見解を借りるならば、「焼畑や半栽培の素地の形成」や「畠の造成・管理」を含めた土地・森林の改変を積極化する形で資源の利用強化が進められていた可能性を見出した。

これに対し、関西地方では上記のような土地・森林の改変を伴う方向での資源の利用強化には消極的で、むしろ森林の恵みをそのまま享受する方向を選択し、堅果類の貯蔵を強化していたことが見出せた。ただし、全国を視野に数量的分析を試みた坂口隆〔坂口2003〕の成果を参照するならば、その貯蔵強化の程度については、かなり低く抑えられていた部類に相当することも判明した。

以上を踏まえながら、本稿の論点——関西縄文社会の地域的特色は何か／それを醸し出した要因や背景は何か——に立ち返り、結論を述べる。

関西縄文社会の地域的特色としては、社会規模が小さく、求心的な集落構造が顕在化しない点にある。また、資源の利用強化という観点からは、土地・森林の改変・開発にはごく消極的であること、後期以降に堅果類の利用強化を進めるが、東日本と比べるとその程度は一貫して低い水準にあり、多く見積もっても半分以下であることなども挙げられた。

西田正規の多角的な批判以降、必ずしも有効性が高いとはいえない難いサケ・マス論に替わって、泉拓良やM.サーリンズといった各氏の示唆を理論的な基盤とするならば、上記の地域的特色とそれを醸し出した要因・背景については、以下のように理解できる。

関西縄文社会は少数・小規模傾向と非求心的な社会構造を根幹にもつが、それは資源環境が貧しいからではない。集団の求心性よりも世帯の自律性を優先し、社会階層化や財・権力の集中にブレーキをかける仕組みが維持され、いわゆる〈過少生産様式〉が保持され続けていたが故である。後期以降に貯蔵拡大という形で資源の利用強化を進めるが、その水準は全国的に見ると低く抑えられており、また土地・森林の改変を伴うような開発強化は避ける方向にあった。遺跡周辺の食料資源環境には、より多様な種類が存在し、そのために収穫期間がより長いため、集約的な労働編成の必要性が低いものだったと考えられるが、このような食料資源環境が、上記の諸特色を醸し出し、保持し続けていたと考えられる。

なお、関西縄文社会で後期に起きた貯蔵強化の程度は、全国的に見ると小さいが、これは通年定住の普遍化に伴う現象〔瀬口2009〕であって、〈生産強化様式〉への本格的なスイッチを示唆するものではない可能性も高い。この点に関する詳細については稿を改めて論じ直したい。

また、本稿の論点は、東日本の縄文社会において見られる諸現象——しばしば社会規模を著しく拡大し、前期中葉や中期中葉、後期前葉などには求心的な構造も顕在化させる傾向——を生み出した要因・背景に対する問いにも必然的につながるけれど、本稿の主題の中心からは外れるので、これについても改めて論じ直すこととし、稿を閉じたい。

註

(1)——https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/issii/db_param

(2)——瞥見する限り、大局に影響するような時期的変化は目立たない。

(3)——クリ、トチノキ、オニグルミといった落葉樹が植生帯を越え、落葉樹林帯だけでなく照葉樹林帯の双方に分布すること、実際に遺跡出土例でもそれが確認できること、照葉樹林帯でも落葉樹の利用はさかんであり、特にトチノキの利用は落葉樹林帯と引けを取らない可能性があることなどについては、既に泉拓良が強調している[泉1999]。

(4)——サーリNZが検討の俎上に挙げた社会では、1日たった数時間の労働で、十分な摂取カロリーを獲得していることがいずれも確認されている。

(5)——〈過少生産様式〉と〈生産強化様式〉の詳細、それぞれがもつ背景、前者から後者への移行のカタクリなどについては、拙稿[瀬口2014 A]に整理してある。上記の諸点は本稿の核心に関わる部分もあるが主題の中心からは外れるので、紙数の都合も勘案し、ここでは要点の記載に留めておく。

なお、サーリNZの著作の中では、〈過少生産様式〉から〈生産強化様式〉への移行には必ずしも食料生産即ち農耕が介在しない事例が示されている点は注意したい。また逆に、食料生産をしても〈過少生産様式〉のままである事例が見出せることもここで改めて強調しておく[瀬口2014 A・B]。

(6)——本章については部分的に既に検討を試みている[瀬口2009]が、本稿では論点を改めて問い直すこととする。

参考文献

池谷和信.1995.「狩猟採集社会の中の農耕」『講座文明と環境』第3巻農耕と文明 朝倉書店, 235-242 頁

石田糸絵・工藤雄一郎・百原新.2016.「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」『植生史研究』24-1 植生史研究会, 18-24 頁

泉 拓良.1985.「縄文集落の地域的特質—近畿地方の事例研究—」『講座考古地理学』第4巻 学生社, 45-64 頁

泉 拓良.1999.「落葉樹林の北進と文化変容」『季刊考古学』第69号 雄山閣, 29-34 頁

今村啓爾.1989.「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』渡辺仁教授古希記念論文集刊行会, 61-94 頁

岩瀬彰利.1997.「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文時代住居の変遷について（I）—三河・尾張編—」『三河考古』10 三河考古刊行会

大野 薫.2012.「縄文集落における小規模性と弱定着性」『関西縄文時代研究の新展開』関西縄文文化研究会, 1-12 頁

小畑弘己.2011.『東北アジア古民族植物学と縄文農耕同成社』

春日井亘・長谷川幸志.2003.「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』（関西縄文論集1） 関西縄文文化研究会 六一書房, 45-60 頁

関西縄文文化研究会.1999.『関西の縄文住居』

関西縄文文化研究会.2000.『関西の縄文墓地』

関西縄文文化研究会.1999.『関西の縄文住居』

関西縄文文化研究会.2000.『関西の縄文墓地』

関西縄文文化研究会.2001.『関西縄文時代の生業関係遺構』

関西縄文文化研究会.2002.『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』

関西縄文文化研究会.2003.『縄文時代の石器—関西の縄文時代前期・中期—』

関西縄文文化研究会.2004.『縄文時代の石器—関西の縄文時代後期・晩期—』

関西縄文文化研究会.2006.『関西縄文人の生業と環境』

クラストル, P.1974.『国家に抗する社会—政治人類学研究（渡辺公三翻訳1989）』水声社

黒尾和久.1988.「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』No.454, 9-21 頁

サーリNZ, M.1972.『石器時代の経済学』（山内昶訳1984） 法政大学出版局

坂口 隆.2003.『縄文時代貯蔵穴の研究』アム・プロモーション

鈴木保彦.2006.『縄文時代集落の研究』雄山閣

瀬口眞司.2009.『縄文集落の考古学 西日本における定住集落の成立と展開』昭和堂

瀬口眞司.2014. A 「縄文文化論の理論的基盤の整理」『紀要』27 公益財団法人滋賀県文化財保護協会, 1-6 頁

-
- 瀬口眞司 .2014. B 「世界の中の縄文文化」『考古学研究』第61巻第2号 考古学研究会, 16-29 頁
土井義男 .1985. 「縄文時代集落論の原則的問題—集落遺跡の二つのあり方をめぐって—」『東京考古』3, 1-11 頁
東京統計協会 .1913. 『農商務統計表 (第28-40次 (明治44-大正12年))』
西田正規 .1985. 「縄文時代の環境」『岩波講座日本考古学』2 (人間と環境) 岩波書店, 112-164 頁
ハンソン, N .1958. 『科学的発見のパターン』(村上洋一郎改訳1986) 講談社学術文庫
藤尾慎一郎 .2003. 『弥生変革期の考古学』同成社
松井 章 .1985. 「『サケ・マス論』の評価と今後の展望」『考古学研究』31-4, 39-67 頁
矢野健一 .2010. 「縄文文化の東と西」『縄文文化の輪郭』(縄文時代の考古学1) 同成社, 154-166 頁
山内清男 .1964. 「日本先史時代概説」『縄紋式土器』日本原始美術第1巻 講談社
吉川弘文館 .1955. 『延喜式』中篇 国史大系第2部9.
渡辺 誠 .1967. 「日本石器時代文化研究におけるサケ・マス論の問題点」『古代文化』18-2, 33-36 頁
渡辺 誠 .1975. 「第5章 総括」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』 舞鶴市教育委員会, 309-320 頁

(公益財団法人滋賀県文化財保護協会, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月17日受付, 2017年6月5日審査終了)

The Factor and Background of Characteristic of Jomon Society in Kansai District

SEGUCHI Shinji

This paper discusses the factor and background of characteristic of Jomon society in Kansai district. The points of the discussion are “Length of the harvest time”, and “Direction of the subsistence system and the degree of the reinforcement”. Therefore I analyzed the variety of nuts which were excavated, the amount of the tool, and the amount to be stored of the nut. As a result, I got the following conclusions.

In the Kansai district, harvest season is considered to be was longer, because kinds of nuts of the remains exhumation are various than East Japan. The Jomon society of the Kansai district avoided the active reinforcement of the environmental development, and they held down the degree of the reinforcement of the use of resources. The scale of the Kansai-Jomon society is very small, and never made centripetal social structure. It was not because resources environment was poor. It was because “underproduction style” was maintained. They continued to give priority to autonomy of the household, and to hold the mechanism to apply a brake to the concentration of social hierarchy and goods and power. Since forest vegetation in the Kansai region had a long harvest season, it was difficult born the need for intensive labor organization. Such a resource environment maintained the character of the Kansai Jomon society.

Key words: environmental development, social structure, labor organization, character of the Jomon society